「型」と「美」
―新たな日本文化論の序論として―

挾　本　佳　代

1. はじめに

> 写真によって現実を確認し，経験を強めてもらう必要があるということは，いまやだれもがその中毒にかかっている美的消費者中心主義である。それはもっとも抵抗しがたい形の精神公害である。美に対する，表面化を探るのをやめることに対する，世界の身体の贖罪と祝福に対する，痛切な憧れ――こういった恋慕の情けの要素はみな，私たちが写真に抱く喜びの中に認められる（ソンタグ 1979, 32）

複製芸術である写真について論じたスーザン・ソンタグの『写真論』は衝撃的な著作だった。ソンタグは複製芸術である写真について論じていただけではない。彼女は，写真を論じることで「近代性について，私たちの現在のありようについて」書いていると悟った（近藤 1979, 217）。写真の問題は，現代のものの感じ方，考え方のひとつのアプローチであり，写真は「世界」を描くことになるとソンタグは言った（同書, 219）。

ソンタグがいう写真による「美的消費者中心主義」によって，近代社会の倫理感や「美」を植え付けることになった。それはまさに写真が消費社会の手先になっているということに他ならない。

ここでひとつ考えてみたい。消費社会や資本主義経済に植え付けられることのない「美」はあるだろうか？　それは多くの大衆が美しいと思うものなのだろうか？「本当に美しいもの」という誰もが認める究極的なものはあるのだろうか？

もしも「美」が消費社会や資本主義経済に植え付けられることのないものだとするならば，それは最終的に個々人の意識の中から湧き上がってくるものなのだろうか？

しかし，個々人の意識も消費社会や資本主義経済に浸食されているとするならば，「美しいもの」は誰によって決められ，誰によって従われるのだろうのか？

ソンタグより1世紀以上前に，ハーバート・スペンサーは「用と美（“Use and Beauty”）」（1852）と「個体の美（“Personal Beauty”）」（1854）において，「美」は「自然」によってそもそもは決定されるものだったと述べ，痛烈な近代社会批判を行っている。すなわち，自然と人間が厳しく対峙するようになった近代社会においては「美」や「美意識」や「美」に関する「価値」

はもはや個々人の意識の中から湧き上がってくるものではなくなり，資本主義によって導かれ，意図的に人間の意識に据え付けられるものに成り下がったと，スペンサーは説いた（挾本2000, 2016）。確かに人間と自然が乖離するようになった近代以降，資本主義からの影響を受けずに自らの倫理観や美意識を維持させることが非常に困難な状況であることは，ソンタグがそれらは「美的消費者中心主義」の渦に巻き込まれていると指摘した通りである。

しかし，本当にそうなのだろうか。この疑問は，ソンタグの近代社会批判を否定するというよりは，スペンサーやソンタグによる近代社会批判からわずかでもこぼれ落ちる「美」や「美意識」は存在しないのだろうかという微かな期待から出てきているものである。

白洲正子は『かくれ里』（1991）において，高度経済成長から取り残されたような滋賀を中心とする山奥の共同体で何世紀も古くから伝えられ，維持されてきた文化や慣習，そしてそれらを支える人間の意識や誇りを論じて一世を風靡したが，当然のことながら，白洲が指摘した文化や意識は当然，人間の「美意識」によって裏打ちされているものである。高度経済成長に汚されない「真空地帯」においては資本主義社会や近代社会とは一種無縁の文化や慣習が透徹されていたわけである（挾本2013）。

これまで筆者は「美」を通して浮上する近代社会批判論のひとつとして，中世における「会所」という場を通し，「美」と「つながり」を考察してきた（挾本2020）。「会所」という補助線を引くことで，中世において封建制度とは隔絶された場で展開された「美」を維持できたシステムが明確になり，そして逆に，現代の私たちはそのようなシステムを有しているのだろうかと問題を投げかけてきた。すなわち，中世の封建制度が近代の資本主義制度にただ置き換えられただけにすぎない時代を私たちは生きて，「美」を感じているのか，そうではないのかを少しずつ解きほぐす作業を筆者は行ってきた。

人間のつながりと会所という場の関係性から浮上してきたのは，「美」とは人間の理想でも普遍的な価値がおかれたものとする必要はなく，『美』とする」べきだということであった（挾本2020, 72-3）。

バラバラな個体に分解されてしまうと消滅してしまうような「社会」のもつ統一性や自律性を追求していくことが社会学に課せられた問題である。それゆえこれまで筆者は「つながり」と「場」に着目し，「美の社会学」を構築する試論を展開してきた。

本稿においても「美」は筆者が提示したように「ある集団内部で揺るぎない基準をもって追求された結果生じてくる価値もしくはその対象」とすることに迷いは一切ないが（挾本2020, 72-73），本稿ではそうした「美」を浮上させるものとして「型」に着目をし，最終的には近代社会批判にまで到達する論の準備として，日本文化におけるいくつかの「型」に関する論考を考察していくことにする。

2.「型」と日本文化

「型」というと,「型」を尊重し，それを踏まえて維持，継承されているのもとして，たとえば武道（剣道，柔道など），武術（古武道のこと），歌舞伎，舞踏，茶道，華道，文楽，能，香道‥‥‥などがある。茶道でいうならば,「お手前の型」や「飲み方の型」がある。そうした一見，不自由とさえ思えてしまうところもある「型」は，ある分野の文化が世代を超えて伝えられていくために必要なものであることはいうまでもない。

「型」に早くから着目し，とりわけ戦後の日本文化，日本社会の変容を浮上させた著作に，安田武の『型の日本文化』（1984），源了圓の『型』（1989）がある。

安田は日本文化を貫くものとして「型」があると説いていた。型は，気質とともに,「動かすべからざる生活文化の様式」の基本であったと指摘する（安田1984, 48）。

> 日本文化を「型の文化」として捉える時，この「型」とは，応々考えられるように，単なる形式主義（フォーマリズム）ではない，ということであった。近代の発想が，日本文化の特異な性格を，正当に理解できず，しばしば見当ちがいの解釈に陥るのは，近代ヨーロッパの言語概念で, 時刻文化を割切ろうとする安易さ, あるいは傲慢さにあった, といえよう。あたかも, ヨーロッパ近代劇のドラマトゥルギーで, 歌舞伎の「類型性」を批判しているように――（安田1984, 256-7）。

安田が批判したのは，戦後，日本人が西欧文化と同じ価値や尺度で自国の文化を捉えることを良しとしていたことだった。「型」は西欧思想が古くから追求しつづけてきた個人の自由を妨げる象徴であり，単なる「不合理な因習」として日本人が「型」を一掃しようとした／しようとしていることを批判した。とりわけ職人や芸人の世界において透徹されて継承されてきた「型」は, それが維持されてきたからこそ日本独自の文化が存続されてきたのであって, そのことを忘れ，そこに貫かれた美意識を捨てて，戦後，大量に輸入されてきた西欧文化だけを追随していく姿勢をとる日本人の文化的堕落を指摘した。[1]

---

[1]「型」なくして職人はありえないことを端的かつ深く論じたものに阿部孝嗣の著書がある。「ものごとを知るということは自らを束縛や制約のなかに自分を押し込めることを意味する。多くのことを知っていくことによって，ものごとを進めていくに当たっての約束事も知ることになる。ものを作るにはそれぞれの約束事があって，その決まりをきちんと守らなければならないということである。実際には，約束事通りの手順を踏んで作業を行ったほうがいいのであるが，まだもの知らぬ者にとってはそれが足柳（あしかせ）のように思えてしまうのである。……正しく手順を踏むことが，結果的には事を円滑に運ぶ手立てになっているとはいえ，不自由さは感じる。面倒臭さかもしれない。少しでも早く製品にしたいと逸る気持ちは，順を追う作業にまどろっこしさを覚える。しかし，勝手な手順で進めてしまうと，あとで必ず不都合が生じてしまうものだ，と言われる。これが長年培ってきた仕事の手順である」（阿部2020，57）。

ある職能の世界において生まれた美意識も，実はかなり危うい状況に置かれてきたことがわかる。安田が指摘するように，戦後流入してきた西欧文化や流行に晒され，西欧文化を良しとする日本人の意識の変化が起こり，そしてその意識がうごめいて多くの人間から成る社会の在り方や価値も変化していく。しかし，そうした時流において，人間の精神の背骨を支えるものといえる美意識が，目に見えるものとして残されるために「型」が必要だったのではないだろうか。職能の世界において，「美」と「美意識」を後世に繋いでいくために「型」の存続が図られてきたはずである。

源が注目をしたのは剣道や能といった，常に身体と訓練された身体の運動によって可能となる「わざ」を生み出す「形」であり「型」であった。しかし「型」はすぐに生み出されるものではなく，決定的に重要なのは「心」であると源は指摘する（源1989, 290）。身体をつかって訓練していくことで「心が形になりきり，形が心になりきって，両者の区別がなくなったと感じる瞬間」に「形」が「型」になるのだという（源, 290）。

さらに源はそうした「型」と日本人の集合的無意識の関連性を追求しようとした。彼は戦後以前, 大正時代のころからとくに知識人においても,「型の喪失」が見られてきたという（源, 6）。

彼は，日本文化の潜在的な可能性を明らかにするためには，無意識的な次元にまで習俗化された伝統と，意識的・自覚的次元における価値としての伝統を見ていく必要があると説いた。つまり，日本文化を深く追求するには,「型」が集合的無意識レベルにまで到達している伝統と，そうではなく常に価値を意識するレベルの伝統双方の視座が必要であるとされたのである。

今日，たとえば武道や茶道などにおいては，ある「型」の取得が認められる段位制度や免許皆伝などがあるが，過去においては崇高な意識のもとに「型」が伝授され，存続維持されていたものが，時代が経るにつれ,「型」さえ踏襲していればその文化を支える「美意識」もついてくるかのような錯覚を起こしてしまっている節がないわけではない。源が指摘するように，日本における伝統が集合的無意識レベルにまで到達していれば，表面的な「型」に対する理解や誤解もなくなるに違いない。

3. かさねの作法

古典文学を通して，日本文化を読み替えた著作が藤原成一の『かさねの作法』である。「かさねる」「くずす」「やつす」「もじる」「もどく」「あそぶ」「たわける」「まねる」「うつす」「うがつ」「からかう」「譬える」「見立てる」といった, いわゆる古典文学における広い意味での「型」を切り口にして日本文化を重層的に解説しようとしたものである。

本のタイトルにもなっている「かさね」が興味深い。能という正統の芸に対し, 狂言は「やつし」「くずし」というべきものである。しかし，この能と狂言がかさねられる。たとえば能

「定家」を「もじり」，それと同じセリフが狂言「祐善」ではかさねられていく。狂言が能からセリフを拝借することで，能と狂言が「それぞれ固有の世界を鮮明にし，補足し合うどころか，互いに引き立て合って」いる（藤原2008, 11）。「かさねることは他を犯すことでなく，他を立てる効用」もあったと藤原は指摘する（藤原11）。

この「かさね」ていく手法は，外国人からはなかなか理解されない神と仏が共存する日本独自の文化もそうであると，藤原は考察した。

神仏習合について，藤原は以下のように考えていた。

> 神と仏はつかず離れず同じところに存在しながら，ときには寄り添い，かさなり合って，神仏をかさねた思想や作法，儀礼，空間をつくり出すこともありました。……習合といえば，神仏のそれぞれの教理や思想，信仰や作法が融合融和して，神仏のアマルガム，神仏のハイブリッドというイメージとなりがちです。……習合という融け合いではなく，二枚の紙や布を少しずらしてかさねたように，かさね合って，かさならない部分ではそれぞれ固有の分を守り，二枚がかさなるところでは神であり仏であるという神仏融通無碍の立場で立て合いました（藤原，20）。

「かさね」という「型」が神仏習合という日本独特の宗教観を表す一方で，たとえば平安時代に生まれた「かさねの色目」では，装束の配色や色の組み合わせが明確に提示されている。春夏秋冬に相応しい「かさねの色目」があり，『源氏物語』に登場する女性たちの装束の記述はすべて「かさねの色目」に則ったものである。紫式部による色彩哲学がそこここに表れていたことはいうまでもない。

「かさね」という「型」が他を引き立て，相乗効果を生むという要素があるということを考えるならば，そこには「美意識」が貫かれているといえよう。神仏習合の宗教観のレベルにまで「かさね」を敷衍するならば，先に源が述べた集合的無意識の次元にまで達している日本文化の現状が浮上してくる。

4. 武術と「型」と人間

これまで見てきたように，戦後の日本社会における「型の喪失」は，すなわち「型」が存続維持してきた「美意識」や価値観を見失わせることとなった。

ここで「型」に対して深い理解がなされていないことへの不信感を募らせる論考から，ふたたび「型」を考えていきたい。

ともに武術に携わる甲野善紀と前田秀樹による往復書簡である『剣の思想』では，「型」について深く論じられている。甲野によれば型の概念は以下の通りである。

> ･･･型の概念は，剣客が一流を開きうるほどの体捌きと精神の在りようを身につけた段階で，自ら得た世界を表現し，その後，その動きを行うことで，さらに自らの内面を掘り下げ，自らの特質を存分に表わし得るものではないか，ということです（甲野・前田2013, 70）。

「型」は武術を行う人間の内面を彫琢していくものであり，「型」を追求するということは決して表面的な形だけを修得することではない。それゆえ，江戸時代の剣客が議論してきた「型稽古がよいか，打合稽古がよいか」という問題は無意味だと，前田は指摘する（甲野・前田2013, 101）。「型」の修得が先なのか，実地訓練でひたすら打ち合っていくのが先なのか，その議論で片をつけるのではなく，武術における精神と「型」の本質的なつながりを見極めることが重要であるということである。

甲野と前田は剣の思想を論じていくうちに，人間のおこなう農業についての論を展開していく。

甲野は，たとえば医療生物学の世界で進展するクローンや臓器培養の研究が，そもそもは人間が自らに有利なように植物を人工的に栽培増殖させていく発想と同様であると指摘する（甲野・前田2013, 148）。そしてそうした文明が構築されていく過程において，各分野で「術の妙を競う」方向に情熱が傾いていき，そしてそれが環境破壊を導くことになったという（甲野・前田2013, 149）。そもそも武術の道に入った動機が「人間にとっての自然とは何なのか」という問いかけであった甲野にとって，武術を極めれば極めるほど，人間の構築してきた武「術」と自然との精神的な乖離が広がっていくことになってしまったのではないかだろうか。

こうした「術」への不信感は，剣術の解説書であり，松林左馬助を流祖とする夢想願立の術理を説いた『願立剣術物語』との出会いによって，人間と「術」と自然との葛藤から解放されたという（甲野･前田2013, 150）。すなわち，人間は自然界の中で「釣り合い」をもって「鳥獣草木森羅万象の動きを虚心のままに受け入れる」ということの必要性が『願立剣術物語』には論じられていたからである。

甲野のいう人間と「術」と自然との葛藤について，前田はいささか否定的である。「農業の全否定は，すなわち道具の全否定になり，行き着くところ，人間のあらゆる作為を否定することに及ぶでしょう。問題は，一体いかなる性質の道具が私たちを含めた自然のシステムを滅ぼすのか，この点にある。これを見抜き，これと戦うことにある」と甲野の主張を一旦受け入れた上で，反論を行っている。

甲野と前田が論じているのは，武術を介在させることで浮上する文明論である。すなわち，農耕を行うことで人類が自然界の中で突出する存在となり，環境問題を発生させたことに対する別角度からの文明批判にほかならない。

「型」があることで成立，発展してきた武術は，単に武の「術」として論じられるべきものではない。武術は人間によって発展されてきたものと考えるならば，その思想も近代社会批判にもつながる重要な端緒となるべきものであることがわかる。

5. おわりに――都市と美と「型」

建築家を中心として都市における「美」を批評していく雑誌が2019年に創刊されている。『都市美』がそれである。

創刊号に掲載されている大澤真幸，木村草太，山本理顕による「家族の成立　コミュニティへの飛躍」と題された鼎談は非常に興味深いものである。都市の中に存在するコミュニティと家族の問題がテーマになっているのだが，最終的に人間の「振る舞い」の話になっている。

都市というと「コミュニティ」の創造と合わせて論じられることが多い。山本と大澤が「コミュニティ」に土地との関連性が考慮される「空間的なイメージ」が織り込まれているところにこそ可能性があると主張する一方で，木村は土地や空間に縛られずに自由に人々が集まることができる「アソシーション」の長所を理解しつつも，たとえ嫌いな人とでも付き合っていかなければならない「コミュニティ」でなければ様々な人間がいてこその世界につながらないという。

そして木村はつぎのように述べている。「コミュニティには選択の契機がない分，思いがけないおもしろい人に会えたりする意外性や，多様性が生じえます。それは世界につながるために優位な点です。‥‥‥アソシエーションかコミュニティかではなく，不意に出会う人たちといかに明るく楽しく振る舞えるかに，人間関係は懸かってくる」（大澤・木村・山本 2019, 35）。以下，この木村と山本のやりとりが非常に注目される。

山本　その振る舞いという考え方が重要だと考えています。初めて会った人とも話ができるには，何らかの振る舞いや作法を身につけている必要がありますが，その作法はコミュニティに中で身につけられるものです。‥‥‥。

木村　しかし，作法は美にとって重大な意味を持ちます。

山本　おっしゃる通りだと思います。美は作法との関係からしか生み出されないのだと思います。共同体的な空間の中でどのような立ち振る舞いが美しいとされるのか，それはまさに共同体感覚です。私たちは意識的無意識的に美という感覚を学習していますが，それは共同体的空間に積極的に参加しようとする意識なのではないでしょうか。

ここでいう「作法」とは「型」のことである。たとえば言っていいこと，悪いことを見極め，年長者を敬いながら，意見を主張していく。初めて会った人に対して，長年の友人と同

じように振る舞うのは，失礼以外の何ものでもない。こうした振る舞いの「型」という作法は家族の中でも教えられ，また家族以外の学校や会社といった集団においても伝えられていく。洗練された振る舞いなのか，野暮ったい振る舞いなのか。これも「型」の価値観として共同体内部で育まれていくものであり，それがやがてそのコミュニティに生きる人間の「美意識」となる。

建築学においても，振る舞いという「型」が，都市や地域に生きる人間の生き方や，都市計画のあり方にも影響を与え，住みやすさや住みにくさまでにも影響を与えるものとして考慮され始めていることがわかる。

本稿で考察してきたように，「型」の喪失はいくつかの文化にとっての損失であるだけではない。それは，つまるところ，人間の生き方の倫理そのものの喪失であり，人間と自然との関係の喪失でもある。「型」の重要性を見失ってしまった私たちは，文化そのものも見えなくなってしまっているとさえ思われる。いわゆる世界における文化的アイデンティティを見失っているために，たとえば経済力や軍事力といった，いわゆる「力」でしかアイデンティティを実感できないのであるとするならば，それは由々しき事態ではないだろうか。

「型」という補助線で「美」とさらなる近代社会批判が浮上することとなった。「型」を通してみえる新たな日本文化論については別稿に譲ることにしたい。

（成蹊大学経済学部教授）

参考文献

近藤耕人（1979）「訳者あとがき――アメリカと写真」, ソンタグ『写真論』，pp.216-221。
甲野善紀・前田英樹（2013）『剣の思想　増補新版』，青土社。
白洲正子（1991）『かくれ里』，講談社。
ソンタグ, スーザン（1979）『写真論』，晶文社。
挾本佳代（2000）『社会システム論と自然――スペンサー社会学の現代性』，法政大学出版局。
――――（2013）『白洲正子――ひたすら確かなものが見たい』平凡社。
――――（2016）「ハーバート・スペンサーにおける美の概念と近代社会」，『成蹊大学経済学部論集』第46巻, 第2号, pp. 35-46。
――――（2020）「『美の社会学』の追求――『会所』という場から『美』と『つながり』を考える」，『アジア太平洋研究』No.45, pp. 69-80。
藤原成一（2008）『かさねの作法　日本文化を読みかえる』，法蔵館。
源了圓（1989）『型』，創文社。
安田武（1984）『型の日本文化』，朝日選書。

Spencer, H. (1852)“Use and Beauty”, *The Works of Herbert Spencer*, vol. 14, 1966, pp. 370-74.
――――(1854)“Personal Beauty”, *The Works of Herbert Spencer*, vol. 14, pp. 387-99.